

新年のご挨拶

日本労働組合総連合会 会長 神津里季生

新しい年を迎え、謹んでご挨拶申し上げます。日頃からの連合運動に対する皆様のご理解とご支援に、改めて御礼申し上げます。

今年は、大正デモクラシーを代表する思想家・吉野作造が、「民本主義」に関する代表的な論文「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」を「中央公論」に発表してから、ちょうど100年だそうです。吉野作造と友愛会を創設した鈴木文治とは同じ宮城の出身で、親交が深かったことでも知られています。ご承知のとおり、民本主義は、天皇主権の明治憲法下において民主主義との接合をはかるもので、「主権がどこにあらうとも、その目的は一般民衆のためでなければならない」という主張は、今なお強く響くものがあります。

同じ論文の中で、吉野はこうも喝破しました。「一部少数のもの利害の爲めに一般の利福を犠牲にするは、現代の政治に於て断じて許すことは出来ない」…もし吉野が、労働者派遣法の改悪、安全保障関連法案をめぐる国会運営など、国民の疑念に答えないまま、合意形成の努力もせず、文字通りの腕力で「成立」させる今の政治を見たら、はたして何と言うでしょうか。民主主義を大切に、働く者や生活者、立場の弱い者の声を受け止めて汗をかくことのできる政治を取り戻すための一年にしなければならないと改めて思う次第です。

職場や産業の営みを通じて民主主義を体現していくことも大切だと思います。そのためにも、まずは組織拡大の取り組みをさらに進め、働くルールが当たり前に守られ、働く者の声が反映される職場を増やさねばなりません。同時に、生産性三原則の本旨を労使で改めて確認することも重要です。現政権は成長戦略などでさかんに「生産性の向上」を標榜していますが、それが登場するのは、投資家のために「稼ぐ力」を高める文脈においてです。生産性向上のための「働き方改革」も、実際の中身は働く者を単なる労働力あるいはコストとみなしているようにしか見えません。労働コスト削減による収益増加を生産性向上と呼ぶのであれば、それは全くの誤解です。「失われた20年」の中で繰り返された合成の誤謬をいたずらに続けることに他ならず、デフレ脱却、好循環など夢のまた夢となりかねません。生産性の向上は、労働の尊厳、人間の尊重が前提であり、誰のための、何のための生産性向上なのかを忘れてはなりません。

数におごり、民主主義をないがしろにするような政治が目に見え、普通の人々の素朴な疑問や怒りが足元から湧き起こりつつあります。私たちは、普通の良識ある国民、市民、働く者の感覚を代表する日本最大の組織として、その思いを結集し、全ての働く者の権利と生活を守るため、全力で取り組んでいきます。

いずれにしても、私たち自身の行動が問われる一年だと認識しています。厳しいときこそ、行動の真価が問われます。「働くことを軸とする安心社会」の実現に向けて、連合総研と連携をとりつつ、連合運動が持つ価値に対する幅広い理解と共感の輪を広げるべく、まい進する所存です。

結びに、本年も連合に対する一層のご支援をお願いするとともに、皆様の益々のご健勝とご活躍を祈念いたします。